

「お金はさ、正しく働いてさ、正しく使うもんぞ」と明治生まれの父母は五人の子どもたちに口ずっぱく教えた。

私は昭和二十一年に長崎県の五島列島に生まれた。敗戦の翌年、日本の混乱期に生を受けたのである。

「こげんな苦しか時にこそ、みんなで助け合うて生きていかんばよ」と父母はいい、我家を頼って来る人は拒まずに、飲ませ、食べさせ、泊らせるのを常とした。

お金も然り。有り金が千円しかなかったとしても、五百円貸してくれという人には迷うことなく貸すのだった。

その時、父母は冗談めかして「こんお金はさ、わたしどんが正しく働いてさ、もうけたお金じゃけん、安心して持って帰って使うたらよかたいね」といった。

私たち子どもに紙芝居代の十円を渡す時にも、「こんお金はさ、かあちゃんがよそさんの着物ば縫うて、もうけた正しかお金ぞ」と念を押すのだった。

三ツ子の魂百までで、私の頭の中にはずっと父母の言葉があり、やがて、私は母親になると、息子に「これはお父さんとお母さんが正しく働いたお金やから、あんたも正しく使いなさいや」といった。



絵・江口修平

## 正しいお金

今井美沙子

父母はまた「金は天下の回り物」という言葉が好きで、よく使った。

「お金に困つちよる人ば見たとに、見て見ぬふりばするとは罪になるとよ。見た以上は助けられる範囲で助けんばよ。金は天下の回り物、いつか返って来るけんね。貸したその人から返って来んでも、回り回って誰かから返って来るけんね。もしもさ、父ちゃんや母ちゃんの代に返って来んじやったら、子どもが代、孫の代に返って来るけんね」といつていた。父母は亡くなったが、今だに、父母の世話になったからといつて、私たち五人の子どもによくしてくれる人たちがいる。

「地球上にはようけ人がおつてさ、食べるのにも困つちよる人どんがおる。じゃばつてん、神さまも仏さまも人間が困るようにはしとらんはず。みんながゆずり合うたらさ、食べ物にもお金にも困らんとよ。ひとり占めしちよる欲深か人間がおるけんよくなかとよ。みんながさ、正しく働いて人助けのために正しく使えばさ、みんな困らんと仲良うに暮らしていけるとよ」

小学校六年卒業の父母だったが、どんな偉い人のいった言葉よりか私の心に残っている。

いまい・みさこ●ノンフィクション作家。1946年長崎県生まれ。77年五島列島の人々の人生模様を描いた『めだかの列島』出版後、本格的な執筆活動に入る。92年『わたしの仕事』で産経児童出版文化賞（JR賞）受賞。著書に『もったいないじいさん』『60歳、生きかた下手でもいいじゃない』など多数。

